

オリンピック

白井 なを子（聖心女子学院高等科）

私は中高一貫校に通っていて、高校進学後も仲間は変わらず中学と高校での生活はそこまで変わりがありません。もう自分が高1だという実感があまりなく、まだ中学生の頃と同じ気持ちです。

でも最近私に考えさせられる事がありました。すでに周りの友達が将来について目標を立てていたのです。私はまだ将来のビジョンや就きたい仕事もあまりパツとしていません。今まで目の前の事に一生懸命で5年後10年後の考えている余裕がなかったので、正直焦りを感じました。だからもう一度自分と向き合う時間を設けました。自分が何をやりたいのか？どのような人間になりたいのか？そのためにすべき事は？沢山自問自答を繰り返し悩みました。

私はその中で1つ気付いたことがありました。それは、私が1年前韓国語の勉強を始めてからというもの毎日の生活は韓国語無しでは出来ないくらい韓国語に夢中だった事です。私は、英語に苦手意識があり語学の勉強を自らするなんて事は今までなく、韓国語が初めて自らやりたいと思って勉強を始めたものだったのです。駅の看板や街中のアナウンス、そんなものを見かけるだけで心が躍ります。勉強してみると、特技も無かったような私が韓国語の勉強を通して他の人とは違う物を身につけられる嬉しさも感じました。独学で机に向かい勉強して来たので、韓国の人と触れ合う機会もなく発音も正確ではないし、周りに韓国語を勉強している友達がいないので、会話をする相手すらいませんでしたが、生活の中で日本語の単語を韓国語に変えて独り言のようにブツブツと口にするうちに、韓国語を身近に感じながら今まで勉強をして来ました。今年は韓国語能力試験を受けてみたり、韓国語で日記を書いてみたり、挑戦してみる事が多く、前よりも毎日が輝いているようです。それほどに韓国語は私に大きな支えであり活力になりました。韓国語はK-popが好きで始めたけれど、今では韓国語が好きで、もっと話せるようになって大好きな韓国語を使って何か人の訳に立ちたい。頭の片隅には、そのような考えがあることに今更ながら気付きました。

自分の正直な気持ちに気付いたとともに新たな目標も沢山出てきました。今の一番の大きな目標は、2020年東京オリンピックで通訳ボランティアをしてみる事です。その目標のためにも通訳ボランティア入門講座に参加して来ました。そこでの講義の中で2020年を機にビジョンを持ってそれに向かって失敗を恐れず努力してください。人生を24時間に例えれば、まだ朝で始まったばかりだから。という言葉に心が動かされました。オリンピックまであと約3年。新たに発見した目標を胸に私の輝ける場所を探して、これからも日々韓国語の勉強を頑張りたいです。

私が感じた韓国

松浦 歩美（筑波大学附属桐が丘特別支援学校 高等部）

私が感じた韓国は、愛が溢れていて、人情があって、とても親切な人の多い国です。4回ほど行った旅行でそう感じました。さらに、私を幸せにしてくれる国です。

私は、身体が不自由です。生まれつきの脳性麻痺で一度も一人で歩いたことがありません。ずっと車いすで生活をしています。もしかしたら、人から見ると私は気の毒な人に思えるかもしれません。でも、私はとても幸せです。なぜなら韓国と出会えたからです。8年前に韓国ドラマを見て大好きになり、ドラマを見ることやK P O Pを聞くことが生きがいになりました。ドラマの内容を理解したい一心で韓国語を独学で覚えました。今では、日常会話なら不自由はありませんし、ドラマは字幕が無くても理解できます。韓国が大好きになったおかげで、2つも夢ができました。1つ目は、大学に行って韓国語を専門的に勉強することです。2つ目は、日本と韓国のかけ橋になることです。

5年前、家族旅行で初めて韓国に旅行に行きました。当時、国同士の関係が緊張していたのと、車いすの私が観光するのでご迷惑なのではないかという気持ちから、とても不安がありました。ですが、その不安は着いてすぐに吹き飛びました。韓国の方は皆さんとても友好的で親切にしてくださいました。車いすの乗りかえを手伝ってくださったり、階段しかない所では車いすごと抱えて下さったりしました。「何か手伝うことがないか」とたくさんの方から声をかけて頂き、人のやさしさと温もりを実感しました。国同士の緊張した関係が嘘のように、そこには平和があり、幸せを感じました。その時、「こんな幸せを、私の周りの人にも感じてもらいたい」と思い、自分に何ができるか考えました。そして「私には、国同士の緊張をなくすなど大きな事はできない。でも、周りの人と平和な関係を築くことはできる。そんな小さな愛が広がれば、きっと大きな平和へとつながっていき、国同士の緊張した関係もいつかきっと緩和される」と思い立ちました。それからは、日本でも、その後3回行った韓国でも、私が接するすべての人とよい関係をつくるために、言い方に気を付けたり、相手を配慮して行動するよう、努力しています。親切にすること、お礼をきちんと言うことを、心がけています。この小さな愛を築くことで、近くて遠い国である日本と韓国の小さな架け橋になりたいです。

韓国は、何度行ってもまた行きたくなる国です。そして恋しい国です。私に幸せと生きがいと夢を与えてくれた偉大なる韓国に感謝して私のエッセイを終わります。

一枚の布が教えてくれたこと

古川 小百合（熊本県）

ここに一枚の韓国製のモシからむし（苧麻）、薄手の麻がある。亡き父がこよなく愛した生地だ。細身の父は、熊本のうだるような真夏の暑さを乗り切るために、韓国から取り寄せたモシの衣類を好んで身につけた。普段着には韓国の友人が贈ってくれた刺繍入りのモシの上着を着こなし、夜はモシの寝具に身を横たえた。僧侶だった父のために、母は法衣も作務衣もモシで特別に仕立てたほどだ。繊細な織り目、しゃきっとした肌触り、自然な色合いや透明感が、白いあごひげをたくわえた父をこの上なく引き立てる。こんなに美しい生地を生んだ韓国とはいったいどんな国だろう。この布を通して韓国への私の思慕はいつしか深まっていった。

二〇〇三年頃から日本に韓流ブームが到来して以降、多くの女性が韓国ドラマにはまったが、私もその一人だった。ドラマの内容もさることながら、衣装や家具、調度品にもくぎづけになる。日常生活のさまざまな場面でモシを使った衣類や雑貨を見かけては、父が思い出されて懐かしさを禁じ得ない。

調べてみると、高麗時代は王様から百姓に至るまで、モシが日常着として普遍化していたらしい。また朝鮮時代になると夏用の高級織物として重宝されるようになり、切れ端を繋いで風呂敷にしたという。それが伝統のパッチワークであるポジャギへと発展したのだろうか。一度衰退したモシの生産も、代々受け継がれた織物文化の保存と継承のために復興へと動き出し、今ではユネスコの無形文化遺産に登録されたと聞く。

私にとって近くて遠い国だった韓国が、一枚の布を通じて身近なものとなった。これまで抱いていた韓国への淡い思慕が尊敬と愛情へと変遷してきたのも、韓国ドラマの影響が大きい。近年は、時代劇のお陰で日本の歴史よりも韓国の歴史に詳しくなった。王族から庶民まで、教科書では学べない彼らの日常が目に見えて分かるのが嬉しい。また日本人が忘れてしまった家族間の情愛や年長者への敬意、愛する人への熱い想いに心揺さぶられるのは私だけだろうか。ドラマの背景に流れる喜びや悲しみには、人間としての共通の真実があるようだ。

侵略、戦争、分断という悲しい負の歴史を乗り越えてきた韓国民衆の底力が今日の韓国を生み出した。どんなに小さなきっかけでもいい。端切れ一枚一枚が繋がって美しいポジャギに甦るように、国境、民族、言葉、文化の違いを越えて心がひとつに繋がれば、韓日間に巣くう差別感情を払拭する大きな力となるのではないか。一枚の端切れが大きな風呂敷に生まれ変われば、いかなる違いも包み込む共生の未来へと繋がることを信じたい。

一枚の布を機に、韓国への敬愛の念は父から子へと引き継がれた。モシの法衣に身を包む父の遺影の瞳には、韓日間の平和への願いが滲えられていたことに、私はやっと気付かされたのである。一枚の布にすぎないけれど、この布が私に教えてくれたことは、思いのほか大きなものだった。

オリンピック

姜 濟燕（白頭学院 建国高等学校）

私はオリンピックの試合観戦が大好きだ。しかし、困っていたことがある。私の父は韓国で生まれ育った韓国人、母は中国で生まれ育った中国人、私は日本で生まれ育った在日韓国人だ。そのためオリンピックを見る時に韓国、中国、日本の中でどのチームを応援したらいいのか、いつも困っていた。

ある日、私はひらめいた。どうして私は応援するチームを一つに絞らなければならないのだろうか。もし、私が韓国、中国、日本の全チームを応援すれば、選手たちがメダルを取ったときの喜びも三倍になるのではないかと思った。私は東アジアチームを応援すればいい。そうすれば、三か国の選手が出場するすべての種目に興味を持つようになり、オリンピックの観戦をもっと楽しめるだろう。

その後、三か国のチームを応援しているうちに、私はあることに気づいた。オリンピックは世界的な競技で、世界中の最も優秀な選手たちが集まっている。そのため韓国、中国、日本の選手たちが決勝戦に進出できない種目もたくさんある。ならば、私は決勝戦を見る必要はないだろうか。勿論そうではない。世界最高レベルの競技を見るのに、国の壁はないはずだ。私は自分の視野の狭さに気づいた。

オリンピックは全世界すべての人のイベントである。人々は平和の為に世界各地から開催地に集まり自分の国を代表し競技に出場している。1988年に開催したソウルオリンピックのテーマ曲である「hand in hand」で歌っているように、皆は手と手をつないでオリンピックに参加している。自分の国のチームだけを応援するのはオリンピック精神に反することだ。すべての参加チームを応援すれば、どの国の選手がメダルを取っても一緒に喜び、自分の国のチームの勝ち負けより、もっと試合そのものの力強さ、スピード、スキル、チームワーク、戦術などを楽しめるようになる。

今まで私は、三回のオリンピックをテレビで観戦した。北京、ロンドン、そしてリオ・オリンピックだ。一時期、選手たちのメダルの獲得にこだわっていたが、だんだんオリンピックの試合でメダル以外の感動も味わえるようになった。オリンピックは公平と平等を目指す競技大会である。しかし、経済力のある国は選手たちに最先端の練習設備、器材などを提供できるが、本戦より小さいプールでしか練習できない選手、走る靴さえもない選手もいる。でも、選手たちはオリンピックに参加するため、一生懸命頑張っている。そして、オリンピックは頑張る選手にチャンスを与えている。私はオリンピックのファンとして、このような選手たちを心から応援したい。

まもなく東京オリンピックが開催される。その時私は大学生。自分の語学能力を生かしボランティアとして参加したい。自分のささやかな力を世界のオリンピックに捧げる日が待ち遠しい。

注文の多い韓国料理店

福田 康世（東京都）

しばらく食べないと無性に恋しくなる、それが石焼ビビンバだ。数ある韓国料理の中でも最高傑作だと私は思う。ご飯とナムル、コチュジャンが混然一体となり、チリチリと音を立てながらゆっくり香りとうまみが引き出されるのは、ぶ厚い石鍋にしかできない仕事なのだ。五感を使って食べながら、この鍋を発明してくれた先人にいつも感謝する。

先日、ふらりと入った小さな韓国料理店での話だ。店は 60 代と思いき美しいおばさんがひとりで切り盛りしていた。迷わず石焼ビビンバを注文。待つことしばし、熱々の石鍋が私の前に運ばれた。美味しそう！さあ食べよう！とスプーンを持ち上げた時、おばさんがいきなり私の手からスプーンを取り上げた。そしてコチュジャンを勝手にたっぷり入れ、かき混ぜ始めた。「何するんです？私のビビンバに…！」と言えもせず、呆気に取られている私に「お客さん、おこげ好きですか？」とおばさんは尋ねた。「あ、はい、好きです…」と答えると、「じゃ先に上半分だけを食べてください。かき混ぜないで、我慢して。半分食べたなら教えてください」そう言ってまた私の手にスプーンを握らせ、厨房に戻って行った。

とんでもない店に来てしまった。その名の通り、混ぜることこそ楽しみのビビンバなのに、スプーンも味付けの自由も奪われ、おまけに半分で知らせるとはどういうことだ…？心は納得していなかったが、しかし口は正直なもので、食べてみるととっても美味しい。くやしいがコチュジャン多めも正解だ。こうなったら乗りかかった船である。半分食べたところでおばさんに声を掛けると、出てきて「お客さん、ちょうど半分ですね。上手に食べました。よく我慢なさいました」とまさかの褒め言葉。しかしその瞬間、おばさんはまたも私の手からスプーンを奪い取り、今度はスプーンをご飯の底に差し込んでグリッと回したかと思うと、反対の手の指でご飯をつまんでひっくり返した！いくらなんでも素手はちょっと…。上がっていた私のテンションまた下がる。しかし、目の前には鍋底の形そのままに、こんがり焼き上がったおこげが出現していた！その香ばしくておいしいことといったら…私はテンションマックスで、夢中で食べた。

結果的にはおばさんの言う通りにしてよかった。しかし日本人からするとちょっとやりすぎ感のある積極的介入はなぜか？味のバランスを考え、石鍋ならではの特性を生かし、美味しく食べさせたいという高い職業意識の表れだろう。完璧な味の加減や加熱時間は長年の経験のなせる技だ。客の前でひっくり返したおこげの色を見て、料理はようやく完成する。私は改めておばさんのプライドに感謝した。石鍋の発明が開花なら、使いこなす人がいて食文化は結実し、美味しいから伝播する。そして異文化圏に住む私たちもその恩恵に浴する。今度の韓国旅行、自分へのおみやげはもう決めた。重いけど、石鍋だ。

私が感じた韓国

大城 沙織（筑波大学）

私は、文化の声を聞ける人になりたい。このことを誰かに言うと、みんな一様に怪訝な顔をする。しかし、私はそう思わない。どんな文化にも歴史がある。それを連綿と受け継いできた人々の思いがある。道端の誰も見向きもしなくなった石像だって、人の笑顔や願いを雄弁に語るができるだろう。私はそうしたものに、耳を傾けていきたいのだ。

私にとって韓国は、遠い異国であった。連日ニュースを賑わせている日本側のヘイトスピーチも見て見ぬふりをしていた。負の感情が渦巻いているこれらニュースは、聞いているだけで私を疲弊させたからだ。

しかしこの異国を身近に感じる場所は、意外と私の足元にあった。グスクである。私は沖縄で生まれ育った。物心ついた頃から歴史が好きで、週末は琉球王国時代のグスクと呼ばれる城跡を巡って歩いた。柔らかい表情をしたものや、勇ましさを感じるもの、どのグスクも私の興奮を掻き立てるものばかりだ。これらのグスクは、日本や中国、そして朝鮮の影響を色濃く受けている。

琉球王国の遺跡群からは、朝鮮の陶器が頻りに発掘される。伝統的な韻文である琉歌にも、朝鮮人陶工の姿は生き生きと描かれている。この事実に気づいた時、私はとても嬉しかった。それは、遠い異国の存在がぐっと近づいた瞬間であり、思わぬ旧友と再会したようにも感じたからである。思えば、「文化の声を聞ける人になりたい」。そう思うようになったのも、この頃からである。

私は現在、大学で民俗学を中心とした比較文化を学んでいる。文化について学ぶ度、その重層性には驚かされる。多くの文化は隣国の影響を多大に受けている。それは良いものを素直に認め、受け入れる柔軟性があったからではないか。文化の重層性とは、まさに豊かさである。美しいもの、心を揺さぶるものに国境はない。例え、国同士が互いに睨みあっていたとしても、私達個人が美しいと思うものを素直に受け入れない理由にはならない。

私は東アジアの一員として韓国を知りたい。昔、日本や中国、韓国も同じ漢文文化圏だったということ。仏教を取り入れながらも日本は神道、韓国は儒教というように、独自の信仰を築いていったこと。私達は互いに接しながら、成長してきた。日韓の文化にある類似点。それは私に日本人である前にアジア人であることを教えてくれる。私の心象には、いつも大好きなグスクが思い浮かぶ。東アジアの文化を受容して生まれた美しいグスクは、私の理想そのものである。

私は将来、文化の声を聞くと同時に、その声の代弁者になりたい。私達のまわりにある文化は、政治問題や地理的制約、時さえも超えることができる。文化に込められた、人々の生き生きとした姿に人種も国籍もない。私はその知を結ぶことで、文化から私達一人ひとりの存在もまたつないでいきたいのだ。

私が考える韓日交流

遠藤 悠奈（尚絅学院高等学校）

「하늘은 스스로 돕는 자를 돕는다」

天は自らを助くる者を助く

これは、天は自ら努力する人を成功へ導くという意味の韓国のことわざである。

私は小さい頃から、母の影響を受けて韓国のドラマや音楽を聴いて育ってきた。小学生の頃には「好きなドラマは？」と聞かれたら韓国のドラマ名を答え、「好きな歌手は？」と聞かれたら韓国の歌手を答えるほど韓国が好きになっていた。しかし何人かの友達には韓国が好きだということを受け入れてもらえなかった。それは仕方がないことだが悲しくてたまらなかった。

中学校に進学し、クラス替えのたびに交わされる自己紹介。その中でも私は韓国が好きだと言えなかった。高校生に進学し、初めて見る顔がほとんどの中で韓国が好きながいるといいな、という少しの期待と願いを抱いて韓国が好きだと紹介してみた。すると私も好きだと数名の子が話しかけに来てくれ、とても嬉しかったことを今でも覚えている。やっと認められたという意識から胸を張って韓国が好きだと積極的に言えるようになり、そして韓国が好きだと言える自分が少し誇らしく感じた。

それから韓国語の勉強を独学で始めた。勉強をしているうちに韓国語の奥深さや楽しさを知って韓国がもっと好きになるきっかけとなった。

それから2年が経って、転機となることが起きた。私の通っている高校には姉妹校と呼ばれる韓国の高校があり、その生徒たちが私の高校へ約一週間の短期留学にやってきたのだ。幸運なことに私は週末に留学生と過ごす機会を頂いた。当日になり私たち日本人4人と韓国人の留学生の計5人でご飯を食べたりショッピングをしたりして楽しんだ。終盤になり、私と留学生が2人でお話しをする機会があった。きっと会話は難しいだろうと思っていたが以前から勉強していたお陰で、知っている語句を使って韓国語で会話をすることができたのだ。正直、韓国語で会話をすることができると思わなかったのでもって驚き、嬉しかった以上に感動した。

その日が日本で会う最後の日だったので別れ際にまた会う約束をした。「受験がとても心配だが、もし無事に大学が決まったら会いに行くね」と告げると、留学生が「하늘은 스스로 돕는 자를 돕는다, 大丈夫。あなたはきっと成功するよ」と言ってくれた。知り合ってまだ1週間ほどなのに、優しい言葉をかけ、力強いことを言えるのは簡単なことではないと思う。

大事なのは国籍や人種ではなく相手自身を理解する気持ちであり、国籍や人種を問わずどんな人でも分かり合えるということを実感した。私たち日本人は韓日交流に対して消極的だが、韓国人はとても積極的に交流しようとしてくれる。そういった気持ちを日本人も持つことができれば韓日交流の幅も広がると思う。

「하늘은 스스로 돕는 자를 돕는다」この言葉を胸に抱きしめながら、私は韓日交流が積極的に行われるような社会になるよう貢献していきたい。

ハングルとの出会い

遠藤 勝雄（東京都）

少年の頃、テレビもない時代に、ラジオ放送で、聞いたことのない、外国の言葉が、聞こえて来た。この言葉を聞いたことが、ハングルとの出会いだった。どこの国の言葉なのか、それは、大きな声で、何かエキサイトして、話をしているように聞こえたのである。

何処の国の言葉なのかは、やがて、十数年が経ち、テレビなど、情報網が発達し、ハングルが目に触れるようになり、それを、映像で見た時、あの、エキサイトして、話しているように聞こえたのは、隣国の朝鮮半島で、話されている言葉であることが判った。ハングルの発音には、濃音、激音があり、それで、エキサイトして、話しをしているように聞こえたのである。映像で目にした幾何学的な文字は、線が縦横に一本、二本、それに、上下に丸が付いたり、下に記号のようなものが付いたりしている。不思議な文字に興味湧いてきた。いつか、あの文字を、読むだけでも出来たらと、思い続けて来た。

物の書には、ハングルとは「大いなる文字」の意味がある。千四百四十六年、李朝の世宗大王が「訓民正音」の名で公布し、十個の母音字と十四個の子音字を用い、個々の文字は、一つの子音または母音を表し、それらを組み合わせて音節分表記すると書いてあった。韓国では、ハングル、北朝鮮ではチョソングルと呼ばれていて、世界で最も幾何学的な文字と言われ、世界遺産にもなっている。それは、実に合理的に出来ている。ちなみに、語順は、日本語とほぼ同じである。従って、日本人、韓国の人達にとってはお互いの国の言葉を覚えやすいと言う利点がある。

それで、そのような利点を生かし、読むことだけでも出来たらの思いが、話して見たい、書いて見たいに成った。まだ仕事があったので、NHK 教育テレビで放送されているハングル講座のテキストを買い込んで、テキストがぼろぼろになるくらい、毎日、通勤電車の中や、仕事の休み時間に見るようにしていた。そのうちに、少しずつ解るようになって来た。やがて、仕事の定年を迎えた頃、市後援の、ハングル講座があるのを知り、受講することにした。それまで、独学での勉強で、文法や発音を間違えて覚えていたが、この講座はネイティブの先生だった。

独学で数年、講座に通うこと三年が過ぎ、文法など基礎講座が終わり、ようやく楽しみにしていた会話クラスに進もうとしていた矢先に、病に倒れ、言語に、一番大事な発音が出来なくなると言う、言語障害になり、通じるハングルどころか、日本語も話せなくなってしまったのである。

ハングルに触れるなんて、考えられなかったが、ハングルを読むことが出来、少し話せ、そして、韓国の友達も出来て、ハングルの手紙も書けるまでに成っていたのだが、惜しくも、体を壊し、ハングルが一休みとなってしまった。無理だろうが、発音を直し、通じるハングル、そして、再び日本語もと、願いつつ、今、日々ハビリに励んでいる。